

コロナ対策について—私たち 1 人ひとりができること Part2

今日、新型コロナウイルスパンデミックの感染拡大が世界中に一気に広がり、まだまだ収束の兆しが見いだせない状況にあります。世界が一つに結ばれ、人類 1 人ひとりの責任が問われることで 21 世紀グローバルな時代へと変化していきました。

一方、科学技術の飛躍的な進展、情報通信技術 (ICT) の進化により、グローバルな環境において第 5 期科学技術基本計画においては、日本が目指すべき未来社会の姿として政府は、これまでの狩猟社会 (Society1.0), 農耕社会 (Society2.0), 工業社会 (Society3.0), 情報社会 (Society4.0) に続く、サイバー空間 (仮想空間) とフィジカル空間 (現実空間) を高度に融合させたシステムによって経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会 (Society5.0) を提唱しています。われわれは、環境・経済・社会のシステムが、相互に関連し合っていることに留意し、物質エネルギーと精神エネルギーを融合し、個人と人類が一体化となる調和した社会を目指していかなければなりません。

われわれはこれまでの 13 年間、がんの先端的医療イノベーション人材養成としてトータルなものの考え方に基づき、多様性の個の生き方、持続発展教育、グローバル化の人材養成の三本柱を中心に「トータル・オブ・システム」を打ち出してきました。今回、われわれは第 3 期多様な新ニーズに対応するがん専門医療人材「がんプロフェッショナル」養成プランの推進を通して、サステイナブル・スーパー・プロフェッショナルの人材養成として緩和医療と多職種教育・均霑化教育を実践し、がん診療連携拠点病院と地域の病院、大学、医療関係者など、患者が自立的に個の責任ある生き方を全うできるように、すべては多様性の中で一つにつながっているという価値観を通して、お互いに寄り添い、理解し合いながら持続可能な取組を推進しています。

私たちは多様性の中の一部であることをはっきり認識して、お互いに共存共生したつながりの中で共に生きる、共に励まし合い、寄り添い、癒し合い、生命の尊厳として善なる心とつながり、新しい緩和として調和した社会を今こそ目指して行かなければなりません。

2017 年に決定された「第 3 期がん対策推進基本計画」では、ゲノム情報をもとに効果の高い治療法を選択する「ゲノム医療」の推進が盛り込まれました。厚生労働省は、ゲノム医療を必要とするがん患者が、全国どこにいても、がんゲノム医療を受けられる体制を構築するため、がんゲノム医療中核拠点病院を全国 12 箇所指定、がんゲノム医療拠点病院を 33 箇所指定し、がんゲノム医療連携病院を 161 箇所公表されています (令和 2 年 4 月 1 日現在)。2019 年 6 月には、「がんゲノム医療」のための遺伝子検査に医療保険が適用されることが決まりました。一方、プレジションメディスンと呼ばれる個人個人により精密で適正ながん医療を行うために、ゲノム科学の成果をがん医療に反映するためのがん遺伝子パネル検査、国内では全ゲノム解析の導入が進められています。

われわれは先端的医療イノベーション人材養成の具体的な取組としてキャンサーボード、多職種連携教育、プロフェッショナルリズム教育、がん診療の均霑化、地域のがん診療の質向上の教育を「トータル・オブ・システム」に基づき実施してきました。また連携大学による先駆的な大学の教育基盤を遠隔同時中継による合同セミナーを通して共有してきました。本学では、2020 年 8 月 5 日、第 31 回本学がんプロ合同セミナー「がんサイバパーと共に歩む」と題し、ZOOM によるオンラインセミナーを開催し 65 名が参加

しました。高度化・複雑化を増す医療現場にあつて高度実践看護師（Advanced Practice Nurse）の第1人者である北里大学病院 緩和ケアセンター・がん看護専門看護師の近藤まゆみ先生より、がんであってもより豊かな人生が歩めるように患者、医療関係者の役割についてご講演頂きました。また、本学附属病院・がん看護専門看護師の畑千秋先生より本学附属でのがんサバイバー支援の紹介をご発表頂きました。2020年9月11日に、第32回本学がんプロ合同セミナー「Precision Medicine 2020: Predictive biomarkerを探せ」と題し、ロズウェールパーク癌研究所乳腺外科主任教授、ニューヨーク州立大学バッファロー校腫瘍外科兼任教授の高部和明先生を招聘し ZOOM による米国とのオンラインセミナーを開催し 58 名が参加しました。さらに 2020 年 12 月 14 日に第 33 回本学がんプロ合同セミナー「がんゲノム医療の現況と展望」と題し、国立がん研究センター研究所 細胞情報学分野 ユニット長の高阪真路先生を招聘し ZOOM によるオンラインセミナーを開催する予定です。

我が国は、高齢化により医療ニーズが大きく変化する中で、地域における医療・介護の総合的なとらえ方が大きな課題となっており、その中で、病院と在宅の医療連携、地域での多職種連携の必要性が挙げられています。国は高齢者の尊厳の保持と自立生活支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を推進しています。

本学では、2020 年 10 月 7 日、第 9 回がん地域連携カンファレンス「病院から在宅へー介護・医療ニーズが高いがん終末期患者を支える地域連携について」ZOOM によるオンラインセミナーを実施し 52 名が参加しました。講演内容として概論「病院から在宅へ」は、田中百合子氏（本学学附属病院患者サポートセンター看護師）、講演 1「看護小規模多機能型居宅介護サービスを利用したがん終末期患者について 実態と課題」は、加藤幸子氏（有）在宅ナースの会看護統括責任者 複合型サービスふくふく寺前管理者看護師）、講演 2「がん終末期患者に対する療養通所介護について 実態と課題」は、植田 浩美氏（あつたか訪問看護ステーション 代表取締役 看護師・介護支援専門員）、講演 3「在宅療養が困難ながん終末期患者の療養場所として 施設紹介」は、斉藤純一氏（株式会社アンビスホールディングス 医心館 ICT 対策本部・地域連携部 看護師）にご発表いただきました。一人一人が調和した精神をもって協力していくことが地域連携、多職種教育、均霑化教育につながってきました。

現在、高齢化により医療ニーズが大きく変化するなかで、「トータル・オブ・システム」に基づき、地域連携における緩和ケアと多職種教育、均霑化教育を行うことができました。

私たちは多様性のなかの一部であることをはっきり認識して、お互いに共存共生したつながりのなかで共に生きる、生命の尊厳、新しい緩和として自らが他と調和した社会を目指し多様性の次世代未来を築いていきます。サステナブル・スーパー・プロフェッショナルの人材養成は、自他融合的価値観として「トータル・オブ・システム」の広がり調和教育として多様性の責任ある個人の生き方、持続発展教育、グローバル社会のあり方につながり、地域連携、生命の尊厳性、緩和医療等、より広がりのある社会を目指しイニシアティブが実地されています。

2020 年 12 月 7 日

横浜市立大学 がんプロ

岡野 泰子